

イサム・ノグチに託された藤村像解説資料 — 1950年9月21日の新聞報道と笹村草家人 —

福江良純（北海道教育大学）

木曾郷土館（木曾教育会）には、新聞3社の興味深い記事の切り抜きが、ハードカバーで装丁されたファイルに保管されている。朝日新聞（南信版）、信濃毎日新聞（北信版）、中部日本新聞の3紙が、いずれも「1950年9月21日」の日付で、石井鶴三作「島崎藤村先生像（第1作）」（藤村像）に関わる、ほぼ同じ内容の写真付き記事を掲載しているのだが、各紙が同時に記事を掲載した経緯については全く不明である。しかしながら、記事を注意深く読むなら、そこにはその記事に託されたであろう芸術上の信念と個人的な願いが判読される。本研究は、記事に明記されながらも当時は願い通りに果たされなかったものが、70余年の時を経た今日、その真意を現し始めた藤村像研究の現況も紹介する。

1. はじめに

石井鶴三作「島崎藤村先生像（第1作）」（藤村像）が保管される木曾教育会木曾郷土館2階には、木取りされた木片、制作過程写真や制作日記、当時の『木曾教育』など藤村像の関連資料も並べられている。その中の一つに、緑色のハードカバーの分厚いファイルがあり、制作者石井鶴三やその弟子であった笹村草家人の手紙、その他の藤村像制作事業関係の書類などが綴じられている。その中に、日付を同じくする当時の新聞記事の切り抜き3枚が貼り付けられたシートがある。朝日新聞、信濃毎日、中部日本の3紙（地方版）が、藤村像が間もなく仕上げに入ること、これに先立ち笹村草家人がイサム・ノグチへこの像に関する資料を渡したという共通した内容の記事を掲載している。不思議なことに、作者の石井鶴三は二次的な扱いにとどまっている。



図1 木曾郷土館藤村像関連資料
(右下の縦位置のファイル内に新聞記事)

この新聞記事は、草家人がノグチに渡した藤村像資料の存在を公に記録した唯一の資料である。写真を担当した中西悦夫が教育会の機関誌上でこの資料に言及したのは、石井の死後1973年のことであり、藤村像の制作途上で3紙が同じ内容の記事を掲載したことは興味深い事実である。ただし、この記事には不可解な点がある。一つは、掲載日1950年9月21日の事由である。そしてもう一つ、果たして資料を渡したことが新聞記事に値するものかという疑問である。だが、記事の背景からは、個人の利害を超えた使命感と切実な願いとが混然とした心情が浮かび上がる。

2. 各紙の紙面

2-1. 朝日新聞「南信版」



図2 朝日新聞南信版 「ヒノキ彫像に結ぶ友愛」 (木曾教育会所蔵ファイルを接写)

©Keibunsha,Ltd. 2024/JAA2400030

【発行元】朝日新聞社

【紙面情報】南信版 ページ数不明

【年月日】1950年9月21日 (木)

【記事タイトル】ヒノキ彫像に結ぶ友愛 石井鶴三氏の“島崎藤村像” 米国にも写真紹介

【記事全文】「今から十年前、文豪島崎藤村が湘南大磯の“町屋園”で文筆に専念していたころ、交友の深かった藝術院会員石井鶴三に彫像を作ってもらおう固い約束が交わされたが間もなく藤村は“東京の門”を執筆中不帰の客となった。石井氏は木曾檜川村奈良井の浄龍寺の閑寂な一室をアトリエとし、昨夏から木曾谷を訪れ、藤村晩年の座像を一尺五寸の良質の木曾ヒノキ材に心血を注いで彫り、十月早々藤村ゆかりの地神坂村永昌寺で最後の仕上げを行うことになった。

なおさきに日本を訪れたアメリカの彫刻家で名高いイサム・ノグチ氏は、この彫刻はアメリカ彫刻界の貴重な研究資料になるとひとノミひとノミの製作過程を撮影した十数枚の写真に、藝術大学笹村助教授の解説をつけ、ニューヨークへ持ち帰った＝写真は石井氏が制作中の藤村座像

【解説・捕捉】1943年、石井鶴三が東京麹町の藤村自宅で制作した肖像（塑像）は、翌年の第30回日本美術院展に「藤村先生像試作」と題されて出品されている。記事中の“島崎藤村像”には、生前の藤村との「固い約束」を示す資料はなく、実際に約束が交わされたかどうかは不明である。また、笹村による解説資料の写真は、実際には40枚近いものであったことが確認されている。

2-2. 信濃毎日新聞



図3 信濃毎日新聞北信版 「神坂村に藤村像」 (木曾教育会所蔵ファイルを接写)

©Keibunsha,Ltd. 2024/JAA2400030

【発行元】信濃毎日新聞社

【紙面情報】北信版 2面

【年月日】1950年9月21日 (木)

【記事タイトル】神坂村に藤村像 石井鶴三氏特殊手法で近く完成

【記事全文】「藝術院会員石井鶴三氏は藤村像を作つてほしいとの木曾教育会のもとめに応じてこの春から西筑檜川村奈良井の浄竜寺で木曾ヒノキを材料にノミを振つていたが、すでに九分通り完成したので、十月早々こんどは「夜明け前」ユカリの同郡神坂村永昌寺に移して仕上げにかかることになつた

完成すれば同村の藤村記念堂におくが石井氏の手法はノミクズを余りださない直さい的な特殊のほり方で、過日訪日したイサム野口氏はこの手法を世界の彫刻界に紹介したいと各製作段階の写真をアメリカに持ち帰つたので藤村像は地元はもとより彫刻界にとつても貴重な資料となるワケである＝寫眞は完成近い像」

【解説・捕捉】記事中の「ノミクズを余りださない直さいたな特殊のほり方」とは、笹村ら石井一門が師匠に認めていた、近代的直彫り手法としての「木取り法」のことである。この特殊性は世界にも類例がないが、そこにセザンヌやキュビズムに通じるものを感じたのがノグチであり、その彼に託されたのが「各製作段階の写真」（解説資料）である。また、藤村像は1949年から奈良井で制作事業が始まっているが、1950年6月にも木曾に滞在して制作しており、「この春から」はそのことを指しているものと思われる。なお、藤村像は藤村記念堂に収められることなく、1974年、石井から木曾教育会に正式に寄贈されている。また、藤村記念館へは、1950年に《藤村先生像試作》のブロンズ像が寄贈されている。

2-3. 中部日本新聞



図4 中部日本新聞 「藤村像・仕上げへ」（木曾教育会所蔵ファイルを接写）

©Keibunsha,Ltd. 2024/JAA2400030

【発行元】中部日本新聞社（現中日新聞社）

【紙面情報】詳細不明

【年月日】1950年9月21日（木）

【記事タイトル】藤村像・仕上げへ

【記事全文】「【木曾福島発】文豪島崎藤村の偉大な文業を木曾谷に伝えるため藤村文庫の設置とともに工芸界の巨匠で芸術院会員の石井鶴三氏が昨秋以来長野県西筑摩郡檜川村奈良井の浄竜寺で制作中の木彫藤村像はようやく完成期に近づいたので石井氏は十月早々来郡、仕上げのノミを藤村の生地同郡神坂村馬籠の島崎家菩提寺永昌寺で揮う

さきごろ来朝したアメリカ四大彫刻家の一人イサム・ノグチ氏は藤村像の彫刻にみせた石井の手法、木取りの卓越さに驚嘆アメリカ美術界へ貴重な資料として発表することとなり、ひとノミごとの制作過程を写真に撮影石井氏の門下芸術大学笹村助教授が説明を加えた解説とともにこのほど羽田からパン・アメリカン機でニューヨークへ持帰つた【写真は完成近い藤村像】

【解説・捕捉】石井鶴三の直筆の日記「島崎藤村先生像刻木制作日記」によれば、1950年、石井鶴三は6月、7月、10月、11月に木曾へ来て制作を行っている。ただし、この年で制作は完了せず、翌年7月19日には木彫第2作目も制作が始まり、その後数年に及んで2作品が同時並行で取り組まれることとなる。この記事中の「アメリカの四大彫刻家」が誰を指しているのかは分からない。

2-4. 各紙の共通性

3紙に共通する記事の骨子は、ここまで奈良井の浄龍寺で行われていた石井鶴三の木彫藤村像の制作が、間もなく、藤村に所縁深い馬籠の永昌寺で仕上げを行うことになった。この藤村像に施された木取りの手法は、有名なイサム・ノグチを驚かすもので、複数の制作過程の写真と藝大笹村（草家人）助教授の解説資料を本国へ持って帰った、というものである。

各紙の間には、若干の細かな齟齬が無くもないが、おおよそ上記の通りの概略で間違いはなであろう。また、これは各種資料に記録される藤村像制作事業の事実経過とも一致する。しかしながら、事実とならなかったことに2点ある。1点目は、「間もなく仕上げ」とならず、翌年以降は再度浄龍寺に制作場所を戻して数年に及んで制作が続いたこと。2点目は、笹村が渡したとされる写真付き解説資料が、海外で紹介されたり発表されたという事実はこれまでに確認されていないという点である。おそらく、この記事の目的、草家人が資料を渡したことを公にするところこそノグチに託した石井一門の記事に現れていない声があったのだ。それが初めて具体的な言葉として確認されたのは、当該の資料が発見された2018年のことである。

3. イサム・ノグチと笹村草家人

3-1. ノグチから見た笹村

イサム・ノグチを研究する者の間で、笹村草家人の名前が扱われることは多くない。それは、ノグチ自身の手記や手紙などに笹村の名前が挙げられることが少なく、わずか1931年の訪日を彼が回想する中で語られるのみである。刊行が実現しなかったノグチの草稿“Draft of ‘A Sense of Place’”には、笹村草家人という彫刻に興味ある若者を紹介され、一緒に奈良と京都をその定番ルートで見て回ったことが書かれている^{註1}。

I was introduced to Sokajin Sasamura, a young student interested in sculpture. He would go with me to Nara and in Kyoto would leave me to my own devices. This was the classic route of instruction into Japan's past, where art and history are bound together. (pp.60-61)

しかしながら、ノグチは道中について、互いに言葉の壁があったことや、それぞれのバックグラウンドの違い、伝統美に求めている価値観の差異にやや不満だった様子である。

We could communicate with difficulty, excepting through the shared experience of what we saw – yet each could only see what he was prepared to see. Our backgrounds were so different. His was the more familiar one of verifying that which he already knew. For me at that time the trip was a deepening awareness of the role of China. Nava is where its heritage enters Japan. (p.61)

ただ、ノグチに最も印象深く記憶されたところに、草家人が毎朝欠かさなかった正座 (Meditation) がある。

Early each morning I could hear Sasamura prepare himself with meditation. (p.62)

当時のノグチにとって、座禅と正座の違いを分ける視点は持ち合わせていなかったと思われるが、自伝 “A Sculptor’s Wrold” でも、草家人の正座について記述されている。

3-2. 笹村から見たノグチ

一方、1931年の出来事について草家人自らの「作家歴」^{注2}では、「ノグチはガイドブックをみて歩いていたのでよい彫刻は見落としていたので一緒に中宮寺や三月堂戒壇員などを見歩いた」とやや得意げでもあるが、「町を歩き乍らよくノグチはラムネをのんだ」と、道中のノグチの微笑ましい様子も記録している。これに続けて記述されている内容はさらに興味深い。「九月にノグチは上京して有島さんの世話であちこち展覧会を見ていた。石井鶴三の彫刻をみるように教えておいたが見落としてきたらしいので一緒に院展へゆくといきなり石井氏の「浴女」という木彫をみつけて「金があればこれを買います」といった。「この人はセザニストだ」ともいい、「キュビスト」だともいった。ノグチは事変発生前に帰米した。翌春ボストンから石井さんの作品の写真が欲しいと云ってきたので「俊寛」その他の写真を送ってやった。」

1931年当時（昭和6年）、草家人は東京美術学校彫刻科に在籍する学生であり、院展で活躍していた石井鶴三に師事する4年前（昭和10年）のことである。この時点で、ノグチに石井鶴三を案内し、予想だにできなかったであろう「セザニスト」、「キュビスト」のコメントがノグチから飛び出したわけである。そこには、意外性や驚きを超えて、その一語で開かれた芸術上の眼差しが

あったのであろう。この一事は、彼の生涯を通じて幾度も特筆されるものとなる。

3-3. 記録性の欠如と真実性

ノグチが第18回日本美術院展を見たこと、石井鶴三の木彫の前でそれと知らずに足を止めて「セザンヌ」、「キュビスト」と作者を評したということについて、草家人の文章以外にその事実を裏付けるものはない。ノグチの側に、そのことを記録する文書はなく、石井鶴三の作品写真を草家人に求めたノグチの手紙も現存していない。この時、ノグチ、草家人の他に誰か同行する者がいた様子もない。もちろん、これは興味深いエピソードであることは間違いないが、美術史上の出来事として表立って語られないのは、その記録性の欠如である。笹村草家人という作家が、後に都合よく作り出した話ではないと示すことのできる客観的な証拠はない。しかし、証拠がないゆえに見えてくるものがあり、そしてそれゆえに事実を超えた真実性が浮かび上がる場合もある。1931年のエピソードに真実味をもたらす出来事が、戦後、1950年の草家人とノグチの再会、東京藝術大学における石井鶴三とノグチの対面である。この時の出来事が、1931年から1950年、大戦を挟んだ実に20年の年月を貫いて9月21日の新聞に記載されている解説資料へ直接つながったのである。

4. アメリカに持ち帰ったもの

4-1. ノグチの来日下の石井鶴三研究室

1950年の来日は、ボーリング財団の助成金を得て、前年の1949年5月のパリ行に始まる世界の調査旅行の最後に立ち寄ったものである。1931年の時点と異なり、すでに高名な芸術家の一人となっていたノグチは、毎日新聞社主催の講演や百貨店での個展、国内の著名人との親交、慶應義塾大新萬来舎のためのオブジェ《無》の製作など、実に多忙な日々を送る。そうした活躍の陰となりこれまでに語られることが少なかったが、5月14日、当時藝大助教授であった草家人の案内により、ノグチは石井鶴三研究室に招かれている。その時、ノグチは藤村像第1作を手に取り、額のあたりを指でかこってノミ痕を示して「セザンヌ！、セザンヌです」と言ったことが記録されている^{注3}。また、7月24日にも藝大構内で、学生を含めた石井研究室の一同とノグチの交流会が持たれている。

ノグチと石井鶴三一門が交わったのは、この2回に限られる。ノグチ自身がこのことを記した資料は存在せず、藝大側の出席者の回想によってのみこの事実が知られる。しかしながら、このひと時の交わりは、それに関わった各人にとっては、それを内在化させていくに値する何かを残したものである。当時、石井研究室で副手を務めていた基俊太郎は、作品《杉山最勇像》(1950)がノグチよりジャコメッティと評されたが、そのことは彼の生涯及んで繰り返されるエピソードとなった。それだけではなく、そこには、独自の空間理論を打ち立て建築家としての実績も残した基の資質が予見されていたのであり、ノグチの遺作モエレ沼公園がオープンする10年近く前、長男の基敦に、「これをどう評価するかは君たちの世代の責任だ」^{注4}という含みのある言葉にまでつながっていくのである。

4-2. 草家人の思い

1950年のノグチと石井の会談は草家人の働きによるものである。これに関わってユニークなのは、ゲストとホストが互いに相知らず、また会談後もそのことを振り返った節がない事である。5月14日の石井の日記にこうある。「先日より裸体をはじめたと今日も裸女座姿 惜しけれど午前にてやめ一時過ぎ美校研究室に行き草家人が案内せるイサム・ノグチ氏に会う 感じよき人にて彫刻の理解あるらし」という程度の印象で、ノグチが帰った後時間が出来たからと大相撲初日を見に行っている^{注5}。特別な一日ということではなかったようで、その後、この日のノグチのことを振り返ることはなかった。ただし、こうした石井の反応は、彼の人に対する淡白さなどではなく、美に対する徹底した純粋さゆえのものと言っていいだろう。そもそも、ノグチの招待には、彼の作品を石井鶴三に見てもらふことも石井を感化することも意図されていなかった。草家人は、石井鶴三に連なる自分たちが確信する、日本におけるその先進的位置を、世界に連なるノグチの眼差しにより評価してもらふことを期待していたのである。つまり、草家人にとって会談の真の目的は、「ツルゾウノチョウコクヲアナタニミセルコト」だったのである。

その際、草家人はただ黙って見せたのではなかった。5月14日には、事前に解説文が用意され、それを元に、新聞社3紙に掲載された写真付き解説資料が作られたのである。

5. 英文解説資料 “my present to memory” (記念のために)

5-1. 資料の所在

新聞の記事に出てくる解説資料については、実在の真偽も含め、その所在が不明であったが、2018年1月、イサム・ノグチ庭園美術館ニューヨークのアーカイブから半ば偶然に発見された^{注6}。この資料の存在については、新聞の他に、藤村像の写真撮影を担当した木曾教育会の中西悦夫によっても記述されている。彼は、石井鶴三の没後に刊行された機関紙『木曾教育』の特集号「木曾と石井鶴三先生」の中で、その資料の中で「世界の美術界へ貴重な資料として発表」と新聞記事の表現を踏襲しつつも、資料のことを「英文解説」と明記している^{注7}。つまり、彼はその資料を直接目にしていた可能性が高い。

この資料は、木取りという伝統的な日本の造形法を、真に近代的な手法として実践した藤村像の初めての解説資料であり、かつ英文で書き上げられたものとして重要である。伝統木彫の概念基盤を共有しない世界に向けて、斬新な木取り法による藤村像がどのように英文で言語化されたのか。藤村像研究の見地からは、その資料自体が「貴重な資料」である。

5-2. 資料の構成

9月21日の新聞記事の中心主題である英文資料は、“my present to memory” (記念のために)と冊子名が附された38丁の立派なもので、その日付として1950年5月14日との記載が確認できる。これは、イサム・ノグチと石井鶴三、笹村草家人らが東京藝術大学で会談した日と一致するが、それはこの冊子が会談当日に手渡されたことを示すものではない。また、冊子には解説文に対応する藤村像の制作工程写真が40枚近く挿入されていたと思われるが、現在は欠落してその所在は

不明である。また、写真が貼られていたと思われる空白のページが見開き17頁（34頁分）存在する。冊子の内容構成は以下の通りである。

1. About the modern sculptors in Japan

(日本近代彫刻の概要)

- ・ wood carves
- ・ Academicians
- ・ “Cubists”(you said)
- ・ The new stylists

2. About Ishii Tsuruzō (「石井鶴三論覚書」)

- ・ His awaking
- ・ His Youthful days
- ・ A a [an] Oriental

3. The explanation for photograph series of Ishii Tsuruzō's wood carving on the statue of Shimazaki Tōson. (藤村像の制作工程写真解説)

4. ワタクシノコトバ

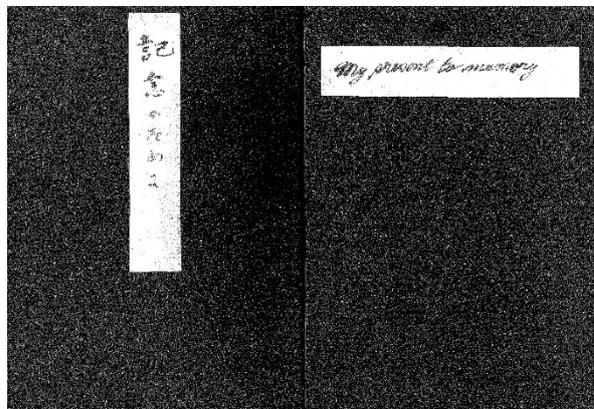


図5 “my present to memory” (記念のために)
イサム・ノグチ庭園美術館 (NY)

上記文章の内、第2章 “About Ishii Tsuruzō” は、『木曾教育』第2号（1951）に「石井鶴三論覚書」と題され、ほぼ同内容の日本語で掲載されている^{注8}。また、その文章には、5月に東京藝大にノグチが訪れた際に話をしたものであると但し書きされている。冒頭の第1章 “About the modern sculptors in Japan” は、草家人らの立場から記述した日本近代彫刻史の概要であり、第3章 “The explanation for photograph series of Ishii Tsuruzō's wood carving on the statue of Shimazaki Tōson” は藤村像の制作工程解説、第4章 “ワタクシノコトバ” は文字通り草家人が個人的にノグチに送ったメッセージである。『木曾教育』に「石井鶴三論覚書」のみが掲載された理由は定かでないが、おそらく、英文資料が全体としてノグチ個人に向けた専門的な内容で構成されていたからであろう。

5-3. 資料の本旨 “Cubists” (you said) について

第2章の日本近代彫刻の概要に位置付けられた “Cubists” (you said) は、この英文資料全体の核心と言える一節である^{注9}。その内容は、石井鶴三や中原悌二郎はロダンの作品に衝撃を受け開眼せられた少数派に属す。文学的観念が取り除かれ、「美術の基礎としての立体に対する感動」 (the emotion for cube as the foundation of fine art) に基づく彼らの作品は、未だに一般に理解されていないというものである。この個所が重要なのは、これがノグチの発した言葉に対する応答に他ならないという点である。つまり、かつて確かにノグチは彼らをキュビストと明言したのであり、そこには彼らが自覚する「立体に対する感動」の意味が理解されているという認識の表明なのである。ここに英文資料の本旨があり、1931年の出来事もこれによって間接的に証拠立て

られている。

5-4. 藤村像の方法論とキュビズムの原理

草家人は、「美術の基礎としての立体に対する感動」のことを「立体感覚」“the feeling upon the cube”（石井鶴三の言葉に従えば「立体感動」）と表記し、その感動に基いて素材に向き合った場合の具体的展開を、第3章の藤村像の制作工程写真で解説している。彼は、師匠の言葉を借りたという体で木取りの論理を次のように要約している^{注10}。

「どんなに複雑に見えてもすべての存在は規則的な或いは不規則的ないくつかの面で制御できる」。(それは)「全ての部分において中心軸として立体をその内側から支配する」(心棒に面が)「収斂される」(からである)。(カッコ部分は筆者加筆)

ここに記述されている、外郭の面と内部の心棒の関係は内のデッサン、外のデッサンとも言われ、この内外の緊密な関係が彫刻を成立させているというのが石井鶴三の確信であった。藤村像がまだ制作半ばであった1950年の時点で、草家人が木取りの論理性をここまで純化できたことは驚きに値する。なぜなら、これは、70余年を経て、筆者が最新のデジタル技術を用い、藤村像の制作工程の再現とその解析を通じて解明した心棒の論理と矛盾なく一致するからである。木取りは、形態の中心軸に相当する心棒を基準として外郭に施され、それを中心に形態を展開（発達）させていく。この場合、心棒は立体を内側から支配（制御）することになるが、これは丁度、形態学上の付加成長に確認される軸柱（collmera）の働きと等しく、そこに確認できる剛体性、内発性、回転性は心棒の機能と矛盾しない^{注11}。この心棒の論理がキュビズムの原理（ムーブメント）と一致することを、筆者はようやく近年明らかにしたばかりである。

ノグチが、石井の造形法にキュビズムを見たのは、ここに由来すると思われる。しかしながら、ノグチの眼差しが正確であったとしても、それに対する論理的な応答が理解されるにはあまりにも早かったのかも知れない。この英文資料や藤村像の写真が、その後ノグチによって紹介されたり、ノグチの芸術観に影響を与えたという痕跡は存在しないからである。

6. 新聞報道と草家人の願い

6-1. 9月21日の謎と報道の理由

9月21日の新聞報道の狙いは、藤村像が間もなく仕上げに入るということを導入に、高名な彫刻家イサム・ノグチに笹村助教授の資料が渡されたことを地域にアナウンスするものである。ただ、何故、9月21日だったのか説明する有力な根拠は、これまでのところ見い出せていない。新聞の記事は、あたかもノグチが本国へ帰る際、その資料を携えたかのように書いてあるが、ノグチが実際に羽田から飛び立ったのは9月5日である。また、9月21日の全国紙に、ノグチに関する記事は全く扱いが無く、3紙の地方版の同時性と内容の近似性からは、それが各社の取材によるものではなく、特定の個人による事前の報道依頼が推定される。

では、その報道依頼の必要性とは何であったのか。それは、記事結びの行に現れているように、草家人の資料の存在を公の事実としたかったと見なすのが妥当であろう。ノグチは、1931年から20年近く経ってなお、かつてキュビストと称賛した石井鶴三の作品をキュビズムの父と言われるセザンヌの名をもって評価した。その二つの出来事は、単に同じことの繰り返しではなく、立体感覚（感動）の共有に基づくという確信が草家人の中にはあったのである。それを、藤村像の解説と共にノグチに伝え、そのことで日本における彼らの先進的立場を世界的な視座のうちに確実なものとしたかっただけではないだろうか。それは、師匠である石井鶴三の名誉のためでもあり、また、その一門のためでもあったに違いない。しかしながら、英文資料の末尾、「ワタシノコトバ」^{注12}には、その資料に込めた草家人の想いが込められている。

6-2. 草家人の願い

「ワタシハヤハリワタシノクニノコトバデカキタイ」とカタカナ表記で切り出される英文資料第4章「ワタシノコトバ」には、自分は何もできないが、「タダーツデキルコトハツルゾウノチョウコクヲアナタニミセルコトデシタ」。そして、今の日本には本当の彫刻ができる者もわかる者も少ないが、「アナタワワタクシタチノチョウコクヲヒトメデヨクワカッテシマッタノデ、タイヘンチカラヅヨクオモイマシタ」と綴られている。そして、草家人は、ノグチと芸術家同士の個人的な親交を築きたかっただけであろう、本国に戻ったら「アナタノヂュウショトaddressトサクヒンノシャシンヲオクツテクダサイ」と、自分の住所を最後に記載している。ここに、草家人の本物の気持ちが滲むようである。「ワタシノコトバ」には、草家人が20年来のノグチとの再会の喜びを孔子の言葉「朋有り、遠方より来たる。亦た楽しからずや」で表明している箇所がある。志を同じくする友と合致した芸術観がキュビズムへの理解だったのであり、その友との絆を確かなものとしたいという切実な願いが、草家人に英文資料を作成させたのではないと思われる。

6-3. 果たされなかった約束

英文資料はノグチが日本滞在中であった8月上旬から帰国する9月5日までの、どこかのタイミングでノグチの手に渡ったものと思われる。資料中の藤村像制作工程写真解説の最後の写真群には、「第7のグループ (No. 30) この写真は1950年7月の進行具合を示す。」^{注13}との記述がある。1950年の7月における藤村像制作は、7月27日～7月31日の間奈良井で行われている。藝大でのノグチとの交流会が7月24日であるから、その時は資料は出来上がっていなかったことになる。

写真解説「第7のグループ (No. 30)」の末尾に次のような一文がある。

「これらの写真は、木曾教育会からあなたに贈られたものである。もし、あなたがアメリカの雑誌で石井鶴三芸術の説明用にこの写真を公開するなら、その雑誌を私に送ってください。私から木曾教育会にそれを送りたいと思います。」^{注14}

新聞記事にも書かれているように、藤村像の資料は帰国後に発表される約束があったのかも知れない。ただし、資料の活用を示す記録は発見されていない。また、草家人は生涯の最後までノグチと交流のあったこと、彼からキュビズムという一語を得たことを繰り返し振り返っているが、ノグチに資料を渡した以後、それについて新たに言及することはなかった。ここには、果たされなかった友との約束があったのであろうか。

しかし、仮にそうであったとしても、資料に写真を提供した木曾教育会の中西悦夫が『木曾教育』上で言及した、ノグチに渡った英文資料に関する次の言葉が真実味を帯びてくる。

「藤村像の制作はかくて広く世の注目を浴びるようになった。それはただ空間的な広がりだけでなく、否むしろこうしたことが忘れ去られた十数年後、数百年後になってあの像自身が光り出し、像の光が益々強くなることであろう。これは国民的文化財として日本のものであり、世界のものであり永く保存さるべきものである。」^{注15}

友情も約束も永遠ではない。しかし、中西はいみじくも上記文章を次の言葉で締めくくっている。「本当の芸術は亡びないのだ。」^{注16}

7. 最後に

ノグチが帰国することを新聞で報じたのは9月4日の毎日新聞であった。1950年9月4日付東京本社版朝刊記事には「五日午前八時卅分羽田から空路帰米する」^{注17}とある。石井鶴三は、その数日前の8月30日の日記に「美校にゆき石膏手入院展搬入 三越にゆきイサム・ノグチ展を見る」^{注18}と記述するのみである。新聞社が藤村像の仕上げと草家人の資料についての記事を掲載した1950年9月21日の石井の一日は次の通りである。

「晴のち雨 午前美校 午後一水会展 山岳画展 小学校児童画展（三越）見る」^{注19}

あとがき

藤村像に向けた、ノグチによるキュビズムという評価は実にユニークである。石井の言う立体感動や心棒＝基本形の方法論が立体に始まるという点と、キュビズムのキーワードとしてのキューブ（立体）の間には、簡単に説明できるものでないとしても、これまで見出されなかった共通原理の存在も否定できないと考え、筆者は、藤村像の制作工程の解析とキュビズムの原理解明を並行して行ってきた。この数年は、藤村像の制作工程解析の研究に著しい進展があり、心棒と基本形（木取りが切り出す最初の外郭構造）の内外的関係性の具体的な仕組みと造形プロセスが明らかとなった。そして、彫刻造形の要として働く心棒に三つの機能 - 剛体性、内発性、回転性が特定される段に及んで、キュビズムの原理としての「ムーブメント」(movement) が浮か

び上がってきた。心棒は、中心動勢（center/core movement）と石井が言い換えるものであれば、藤村像とキュビズムの作品は、ムーブメントの原理を共有し表現の態様において異なるものという説明が成り立ってくる。

こうした最新の研究成果を携え、2023年6月にイサム・ノグチ庭園美術館（NY）に研究報告のプレゼンテーションを行った。藤村像を「キュビズム」という観点でも検証し、同時にキュビズム自体の成立要件も考究するという研究の切り口は、ノグチの言葉に始まっているからである。美術館では、アーキビストのジャニン・ビウーノ氏（Janine Biunno）が出迎えてくれた。同席するはずであったキュレーターのマット・カーシュ氏（Matthew Kirsch）は前日に体調を急変させ、自宅で静養しているとのことであった。プレゼンをして驚いたことには、筆者が「これまでの研究から、キュビズムの原理はムーブメントにある」と表明した際、ジャニン氏が即座に「私もそう思う」と非常に強く同意したことである。そして、藤村像の木取り工程上に明瞭な心棒の存在とその機能についても高い関心をもって聞き入ってくれたことは、想定以上の手ごたえであった。そして、ノグチと石井鶴三の関りの研究がここまで一貫した成果となっていることをうれしく思う。これからも私たちとコンタクトを保ってください。また、何かあればいつでも連絡をして欲しいという、温かい励ましの感想を頂いた。

この日、残念ながら会えなかったマット氏には、帰国後にプレゼンテーションで用いたスライドをPDFに変換してメールで共有した。数日後の彼からの返事には、「それは、あなたの研究プロセス、石井鶴三の方法論を21世紀のモデリング技術に適用することを示す興味深い資料です。（It's an interesting document showing your research process, your application of Ishii Tsuruzo's methods to 21st century modelling technology,）」との記述があった後、追伸するかのよう、「思うんだけど、君と石井鶴三はこの数年、協同関係にあるね!!!（Just think: you and Ishii Tsuruzo have been collaborators for a few years now!!!）」と感想が添えられていたことは、筆者としても感慨深いものがあった。

注

- 注1 イサム・ノグチ庭園美術館ニューヨーク所蔵資料、MS_BOL_017_001, pp. 60-62
- 注2 笹村草家人(1958)、「草家人彫刻作品集」（私家版）、p. 8
- 注3 笹村草家人(1974)、「石井鶴三先生語録」、『木曾教育』第42号、木曾教育会、p. 101
- 注4 基俊太郎の長男で写真家の基敦氏から直接伺った話。1995年頃とのこと。
- 注5 石井鶴三(2005)、『石井鶴三日記Ⅲ』、形文社、p. 242
- 注6 この資料について実存、現存も含めその所在を確認するため2017年に本格的に調査を始め、その年の11月にはニューヨークのイサム・ノグチ庭園美術館に照会を掛けた。当初、美術館のキュレーター、マット・カーシュ氏からは、その資料は確認できなかったが2か月後の2018年1月20日にマット氏より“I was going through some archives materials this morning and stumbled on to this handwritten essay on Japan & woodcarving by

Sasamura dated 1950, which discusses Ishii, Tsuruzo.”という文面と共に、笹村草家人の英文資料“My Present to memory” (Sasamura_My_Present_to_Memory_1950) のPDFがメールで送られてきた。なお、この資料は、今現在、ニューヨークのアーカイブシステムに組み込まれていないようで、検索システムではヒットしない。筆者は2018年にこの英文資料の現物をアーカイブ現地で確認し、その後、資料全文の翻訳及び欠落していた写真を復元して「翻訳 笹村草家人 My Present to memory — イサム・ノグチに伝えられた日本近代彫刻史と石井鶴三」と題した翻刻資料を、『信州大学附属図書館研究』第8号(2019) に掲載した。

- 注7 中西悦夫、「島崎藤村先生木彫像」、『木曾教育』第42号、木曾教育会、p. 125
- 注8 笹村草家人(1951)、「石井鶴三論覚書」、『木曾教育』第2号、木曾教育会、pp. 28-32
- 注9 福江良純(2019)、「翻訳 笹村草家人 My Present to memory — イサム・ノグチに伝えられた日本近代彫刻史と石井鶴三」、『信州大学附属図書館研究』第8号、p. 29(2023修正版)
- 注10 前掲福江、pp. 37-38
- 注11 軸柱 (columella) は、巻貝の場合、貝殻を壊したり、縦方向に半裁した場合やX線写真等によって確認される構造であり、巻貝の頂点とその外郭の中央を貫く中心軸である。そこに認められる「剛体性、内発性、回転性」の三つは、造形論上で筆者が確認した心棒の機能をここに照らして齟齬がないものとして記述したものであり、形態学でその機能的な3要素が挙げられているわけではない。
- 注12 前掲福江、p. 44
- 注13 前掲福江、p. 43
- 注14 同上
- 注15 前掲中西、p. 125
- 注16 同上
- 注17 毎日新聞、1950年9月4日付東京本社版朝刊記事
- 注18 前掲石井、p. 260
- 注19 前掲石井、p. 263

図版出典

- 図1 筆者撮影
- 図2 筆者撮影*
- 図3 筆者撮影*
- 図4 筆者撮影*
- 図5 イサム・ノグチ庭園美術館ニューヨーク提供

*図2 - 図3の新聞各紙の切り抜き画像は、新聞社各紙の許諾を得て掲載。

参考文献

- 『イサム・ノグチ展』(1992)、東京国立近代美術館
- 石井鶴三(2005)『石井鶴三日記Ⅲ』、形文社
- 『木曾教育』(1951)第2号、木曾教育会
- 『木曾教育』(1974)第42号、木曾教育会
- 笹村草家人(1958)「草家人彫刻作品集」、私家版
- 『笹村草家人作品集』(1994)、礪山美術館
- 『基俊太郎作品集』(2014)、礪山美術館
- Haiden Herrera (2015), “LISTENING TO STONE”, Farrar, Straus and Giroux, New York

Acknowledgment: 本研究はJSPS科研費 JP21K00124 の助成を受けたものである.